

ジョン・ダン『不意に発生する事態に関する瞑想』

試 訳 (III)

湯 浅 信 之

XI 医師は薬草や宝石を用いて、襲われた心臓から毒を抜く

心臓を病気の毒素及び悪影響から守るために、医者は強心剤を用いる

黙 想 XI

此の世の名声は他人の風評の上に築いた楼閣であり、本来は実在しないもの、実体のないものであると言われるが、このことを最もよく論証し、実証するものは人間の心臓であろう。心臓は絶えず働き、動き、常に忙しく、何時も全ての事を行っている振りをし、身体全体に活力と能力を与えているように見えるが、病気がそれを襲うときには、身体の他のどの部分よりも早く危機に晒され、敗北するのである。心臓よりは脳のほうが長持ちがする。それよりも更に肝臓のほうが長持ちする。それらの臓器は籠城に耐えることができるが、心臓は不自然な熱、反抗的な熱によって、まるで地雷に爆破されるように、一瞬のうちに吹き飛ばされてしまう。しかし、心臓は人体のなかで他のどの部分より早く生まれるから、自然の長子であり、それより後に生まれる他の部分は、弟や召し使いとして心臓に依存しているので、心臓には生得の権利、すなわち、長子権があるのである。従って、しばしば長男が必ずしも家族で一番強くないように、心臓は一番強い臓器ではないが、それでも、真っ先に注目され、治療を受けることは道理に適ったことである。脳と肝臓と心臓とは身体のなかで三頭政治を行って

いるのではない。すなわち、四大元素が我々の存在を支えるために、主権を分担しているように、我々の健康を支えるために、平等に主権を分かち合っているのではないのである。そうではなくて、心臓だけが主権をもち、王様のように君臨している。他の臓器は、どんなに高い地位にあっても、どんなに重要な役割をもっている、家臣のように心臓に仕えなくてはならない。それは子供が親に、全ての人が目上の者に仕えなくてはならないと同様である。たとえ親や目上の者が彼等に従い仕える者よりも弱くてもそうしなくてはならないのである。このように心臓を重視しなければならない義務は、自然の二次的命令に基づくものではない。すなわち、自然から推論によって生まれ、導き出される結果、結論によるものではない。(我々は自然の法則によって多くの制約を受けているが、自然の一次的法則による制約は少ない。例えば、我々の持ち物における所有権に関する様々な規定は、「一人一人にそれぞれの物を与えよ」²⁴⁾という自然の法則に基づいているが、自然の一次的法則によれば、「私の物」「あなたの物」という区別はなく、所有権は存在せず、全てが全ての共有なのである。同様に、目上の者に従うことは、自然の法則に基づくものであるが、自然の一次的法則には、上下の差はなく、支配権はない。)しかし、主君に全てが協力するように、心臓に身体全ての部分が従属することは、自然の一次的命令によるものである。何故なら、そうすることは生命の保存を図ることであり、まず自己を救うことだからである。医者が脳や肝臓の治療を中断することがある。直ちに特別な治療をしなくても、それらは生存できる可能性をもっているからである。しかし、心臓がやられては、それらが生存できる可能性はないのである。先ず他人を助けようとする場合でも、我々は主に自分のことを考えているのである。親切な相互扶助というものは、他人に対しては補助的なものであり、我々の本当の目的は自分である。王様はさんざん苦勞したあげく、次のような報いを受けるのである。時には法律の力を借りなくては、服従してもらえないばかりか、自発的に服従していると見える時でも、服従しているものたちは、自分たちのためにそうしているだけなのである。人間の偉大さなどは、何と小さなものであろうか。

人間はそれをまやかしのレンズを通して拡大して、大きいものだと思い込んでいるが、それは独りよがりに過ぎぬ。更に、人間の身体に君臨する王である心臓の不幸は、此の世の偉大な人達である王様にも適用できることであるが、それはこういうことである。全ての悪性の病気の害毒は心臓に向かい、心臓に固執するのである(邪悪な愛着と言うべきか)。同様に、悪人達の敵意も最も偉大なる者、最も優れた者に向けられる。その結果、偉大さだけでなく、善良さも、悪に対する鎮痛剤・強心剤としての効力を失ってしまうのである。また、何度も服用して慣れてしまうと、自然や、医学が提供し、調合してくれる最も優れた、最も高貴な強心剤でも、その非凡な効力を失って、強心剤でなくなるように、心にとって最も良い薬である忍耐も、あまり用い過ぎると返って敵の害毒と悪意を増長させて、忍耐すればするほど侮辱されることになるのである。神は無からこの地球を創造され、この地球から他の多くのものを造られたが、そのとき頼りになるものは殆ど持って居られなかったというべきである。何故なら、この地球ほど無に近いものはないからである。しかも、偉大な人間は、その地球のほんの一握りの土に過ぎない。人間は大地を闊歩し、全てを足下に従えていると思っているが、そう考える頭は土でできている。彼の頂点、すなわち、頭を被う肉も土である。更にその上にあるもの、多くのアブサロムたちが自慢にする髪の毛も、²²⁵⁾泥土の上に生えた藪でしかない。地球はなんと小さな世界であろうか。それなのに、人間は地球しか持たず、土でしかない。心臓は人間のなんと小さな一部であろうか。それなのに、心臓は人間の全てである。しかも、それは他人がもたらす外からの害毒に絶えず晒されているだけではなく、悪性の病気が体内に生む内的な害毒にも侵されるのである。ああ、生まれる前にこの様な人間の不幸について知ることができていたら、この様な状況の下で、いったい誰が人間として此の世の存在を買いたいと思ったであろうか。

論 議 XI

私の神よ、私の神よ、あなたが私に求められるのは、ただ私の心臓だけである。あなたは「わが子よ、あなたの心をわたしにゆだねよ」²²⁶⁾と言われた。私の心臓をもっておりさえすれば、それで私はあなたの子供になれるのであろうか。私の心臓と引き換えに、あなたは相続権を与えて、私を子供として認知し、何かして下さるのであろうか。ああ、あなたは悪魔に向かって、「お前はわたしの僕ヨブに気づいたか。地上に彼ほどの者はまい」²²⁷⁾と言われたが、私の恐怖、憎悪、嫉妬はあなたに向かって、「あなたは私の心臓に気づかれたか。此の世にこれ程ひねくれた心はあるまい。あなたはそれを求められるのか。私の心臓を差し出せば、あなたの永遠の御子の共同相続人、すなわち、あなたの子供としてもらえるのか」と叫びたくなる。「人の心は何にもまして、とらえ難く病んでいる。誰がそれを知りえようか」とあなたは問われたが、「心を探り、究めるのは主なるわたしである」²²⁸⁾と答えておられる。あなたは私の心をいつ探られたのであろうか。あなたはまさかアダムの体内にあなたが造られたような心臓を、私の中に見出そうとされているのではあるまい。あなたはかつて人の心を探られ、我々の心にあらゆる段階の悪を見出されて、「常に悪いことばかりを心に思い計っている」²²⁹⁾と言われた。あなたはそのことを覚えておられるのに、私の心臓を求められるのであろうか。ああ、全ての光を造り賜うた神よ、私はあなたが全てのことを知っておられることを知っている。「その計画を人に告げ」られるのはあなたである。²³⁰⁾あなたなしには、ああ、最高の善である神よ、私の心がどれほど邪であるかも、私は知ることはできない。あなたは御言葉を通じて、全ての人間の心は全ての悪の洪水に取り囲まれてはいるが、「主の御心に適う人を求めて」²³¹⁾見出した、と私に告げられた。「わたしはあなたたちに、心にかなう牧者たちを与える」²³²⁾と言われたのもあなたである。私はあなたの御言葉から人の心に関するよい証言を得ることができる。たとえば、「一つの心」²³³⁾「聞き分ける心」²³⁴⁾「揺れ動く心」²³⁵⁾

「知識を求める心」²³⁶⁾ある場所では、「賢明な心」²³⁷⁾また、他の場所では、もっと偉大な「主と一つの心」²³⁸⁾外に邪なところがない「正しい心」²³⁹⁾内に汚れたところがない「清い心」²⁴⁰⁾などをあなたの御言葉の中に見出すことができる。もし私がそのような心をもっていれば、私は喜んでそれをあなたに捧げるであろう。しかし、あなたの御言葉の中には「石の心」²⁴¹⁾もある。私は私の心をそのような心にしてしまったのである。私は「その心は網」²⁴²⁾であるような者を見つけて、「燃えるかまどのような心」²⁴³⁾と交わったのである。そうして、情欲と、嫉妬と、野望の炎が私の心を焼いたのである。「主人に信頼される心」²⁴⁴⁾もあるが、「自分の心に依り頼む者は愚か者」²⁴⁵⁾である。そのような人の心に、あなたが精神的な失望、落胆、憂鬱を与えられると、彼の道徳的節操と社会的堅忍に対する自信が彼を裏切ることになる。これらの心に加えて、私はもっと悪い心、すなわち、悪魔自身が入り込んだ心、ユダの心も見つけたのである。²⁴⁶⁾悲しいことに、私の神よ、私は最初に述べたような良い心は持っていない。最後に述べたような悪い心は、あなたに捧げるべきものではない。私はどうすれば良いのであろうか。心を捧げなければ、私はあなたの子供になることができないのに、私には捧げるべき心がないのである。最初に述べたような心を持つ人には、あなたは「心に喜びを」²⁴⁷⁾与えられるが、私にはそのような喜びはない。最後に述べたような心を持つ人には、あなたは「おびえた心」²⁴⁸⁾を与えられるが、有難い事に、ああ神よ、私はまだそのような怯えは知らないのである。そうであれば、ちょうど中位の心もあるはずである。あなたに捧げるほど完全ではないが、捧げることによって改善されるような心、あなたが拒絶するほど絶望的ではなく、あなたが受け入れることによって是認されるような心があるはずである。それは「溶ける心」²⁴⁹⁾「悩む心」²⁵⁰⁾「傷ついた心」²⁵¹⁾「打ち破られた心」²⁵²⁾「悔い改める心」²⁵³⁾である。あなたの岩をも貫く聖霊の力強い働きによって、私はそのような心を与えられている。あなたの僕であるサムエルは、イスラエルの家全体に対して、「あなたたちが心を尽くして主に立ち帰るといふなら、心を正しく主に向けなさい」²⁵⁴⁾と言っている。私の心が主に向けられているのであれば、それは「帰る心」

である。帰る途中の私の心を御覧になれば、あなたは進んでそれをあなたの家に運んでいかれるであろう。いや、主のほうに私の心を向けられるのもあなたである。このように私の心を溶かし、傷つけ、打ち破り、悔い改めさせることは、あなたの目的を達成されるために、あなたが用られる手段である。そうであれば、私の病は、その苦しみにもかかわらず、「保証として私の心に与えられたあなたの霊」²⁵⁵⁾なのである。そして、あなたが保証を与えられる時には、必ず約束は実行される。ナバルは自信をもって酒を飲んだが、彼の心は翌朝「石のようになった」²⁵⁶⁾のである。ああ、主よ、あなたは私に苦蘆を与えられ、その故に私は多少の不安を覚えたが、翌朝あなたはそれを晴らして、私の心に生氣を与えられた。ダビデは、「サウルの上着の端を切ったとき」²⁵⁷⁾と、「民を数えたとき」²⁵⁸⁾に、心の呵責を感じた。私の罪を数えるときに、私の心は打ち砕かれる。しかし、私の罪は死に至るものではないから、私の心は死なず、あなたの中に生きているのである。しかし、私がこの大きな病院、この病氣と病苦に満ちた世界、この癩病に憑かれた家に留まる限り、この私のこの肉の一片、私の心臓は、あなたによってあなたに向けられているにもかかわらず、有害な毒性をもった蒸気の侵害を受けるものである。しかし、私はあなたによって強心剤を約束されている。「心に痛みを覚え」、²⁵⁹⁾あなたの神殿で祈るならば、あなたはその心を救い、あらゆる悪の力から、心の病から、守って下さるのである。従って、「あらゆる人知を超える神の平和が」、私の「心と考えとをキリスト・イエスによって守る」²⁶⁰⁾ことになる。

祈 禱 XI

ああ、永遠の最も恵み深い神よ、あなたの上院、すなわち、天国には、様々な部屋があるけれども、あなたはどの部屋にも均等に、しかも平等に存在している。しかし、あなたの下院、すなわち、この地上においては、あなたは全てを満たしているにもかかわらず、或る所より他の所に、例え

ば、私の部屋よりも教会に、祈りの中よりも聖体の中に偏在している。従って、この私の肉体というあなたの家においても、あなたは何時でも存在し、全ての部屋で常に働いておられるが、他の器官よりも特に心臓において、あなたの効果的な存在を示して頂きたいと、私は慎んで祈るものである。あなたが聖別された国王の館にも、二心のある者、裏切者はやって来る。あなたの館、教会にも、偽善者や偶像崇拜者がやって来る。あなたの家である私の肉体の部屋にも、誘惑者が来るし、伝染病もやって来る。ああ、しかし、私の神よ、あなたの寝室である私の心臓には、その様なものが侵入するのを防いで頂きたい。ヨブは自分の目と契約を結んだが、²⁶¹⁾その契約を守らせたのは、彼が契約を結んだことではなく、あなたが彼の心に住んでおられたからである。あなたの御子もその心に「死ぬばかりの悲しみ」²⁶²⁾をもち、死が近づいた時には、ためらい、それから逃れるように祈られた。しかし、同時に、御子は強心剤も持っておられたので、「御心に適うことが行われますように」²⁶³⁾と祈られたのである。あなたはあなたの養子である我々を悪質な誘惑に罹らないようにはされなかったが、我々を誘惑に売り渡されたのではない。また、強心剤を拒んでおられるのでない。私は洗礼という強心剤により原罪から清められている。また、聖餐にあずかることによって、あなたの血という強心剤を飲み、私の犯した習慣的な罪から救われている。ああ、主よ、あなたは全ての被造物の中に全ての薬効を与えられ、蝮の肉ですら強心剤の一つとされた。そうであれば、あなたはこの病気を永続的な健康に、この衰弱を永続的な活力に、この心臓の衰退と消耗を強力な強心剤に変えることができる。あなたの祝福された御子が、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」²⁶⁴⁾と祈ったとき、あなたは彼に手を差し伸ばされたが、それは彼の悲しい心を楽にするためではなく、彼の清い心を受け取るためであった。彼も彼の心を更に長い間あなたから引き離して置こうとは思わず、進んでそれをあなたに委ねたのである。いま私はあなたの御手が私の上に置かれているのを知る。私はなぜあなたがそうされたのか、その意図は何かと尋ねる積もりはない。私に暫くのあいだ私の肉体のなかに留まるように命ぜられるのか、それと

も、直ちに天国にあなたを訪ねるように命ぜられているのか、私は問わない。それを望んだり、考えたりする積もりはないのである。我々の性質の弱点である好奇心は誘惑を生む。あなたの意思が何であるかを知る前に、それに無言で絶対的に服従すること、それが私の強心剤である。ああ、私の神よ、どうかそのような強心剤を用意して下さい。そうすれば、私もあなたに会う用意ができるでしょう。あなたが此の世で病の苦しみを通して私を教化して下さい、私は一段と高い位に昇り、あの高い所、歓喜と栄光に溢れたあなたの国で、あなたに仕えることができるに違いありません。アーメン。

XII 足に鳩を貼り蒸気を抜く

私の頭から蒸気を抜くために、医者は鳩を用いる

黙 想 XII

蒸気が人を殺すのであれば、人を殺せないものがあるだろうか。巨大な象も、小さな鼠に殺される。兵士が鉄砲の弾に当たって死ぬのは、彼等の「日々の糧」である。しかし、散弾に当たって死ぬ人は少ない。人の命は小銭では売れないほど価値のあるものである。命は端金よりも高価なものである。もし、雷が大砲が空気を激しく振動させたのであれば、空気は水よりも凝縮され氷のようになり、石化して石のような硬度になるから、人を殺すのは当然である。しかし、蒸気に過ぎないもの、しかも、単に吐き出されるだけで、圧力を加えてない蒸気が、人を殺すのは不思議である。それは、我々の乳母が我々を殺すようなものであり、我々を養い育てるべき空気が我々を殺すことになる。もし、神が直接委任した代官である自然に不服を述べるのが、半ば無神論と思われるのでなければ、誰も自然の手に委

ねられた自分を哀れと思わない人はあるまい。何故なら、自然は我々を他の者が撃つ的として高く掲げるだけでなく、まるでガラスのように我々を自ら吹いて楽しみ、遂には、我々が自然の息吹で粉々に砕けるのを見るのである。もしも、丁度プリニウスがわざとエトナ山の蒸気を探し求め、敢えて蒸気の形をした死が最悪を行うように挑戦し、最悪を経験して死んだように、²⁶⁵我々がこのような悪性の蒸気を自ら探し求めたのであれば、或るいは、このような蒸気が我々を待ち伏せし、長い間閉じ込められていた井戸か、新しく掘られた鉱山の坑道から、不意に我々を襲ったのであれば、誰も文句を言う者はいないであろう。そのような場合、我々が文句や不平を言うべき相手は、運命の女神だけであり、彼女は蒸気よりも空虚なものだからである。しかし、我々自身が毒気を吐き出す井戸、火煙を吹き上げるかまど、窒息させ息の根を止める毒気を噴出する洞穴であるならば、自分の隣人、親友、兄弟が自分を殺した、すなわち、毒気を含んだ噂話をして自分を殺したという状況を作り上げて、悲しみを増すことができる人はいないのである。何故なら、我々は同じ方法で同じ事を我々自身に対して行い、我々自身の毒気で我々を殺しているからである。また、もしこのような自己破壊の原因が、我々の意志によるもの、或るいは、我々の意図に支援されている場合には、いや、我々の過ちに起因する場合でも、我々は責任の一端を担い、原因を責めるだけでなく、我々自身を責めなくてはならない。故意に暴飲暴食を重ね体調を崩してかかる熱病、不養生や淫乱がまねく肺病、我々の生得の能力を誤用したり、過使した結果の狂気などは、我々自身から出た病気であり、我々自身が自己破壊を計ったものであるから、消極的ではなく、積極的に、死を招いたのである。しかし、私の場合、一体何が原因でこのような蒸気を発生させ、それを吸引することになってしまったのであろうか。医者によると、それは私の憂鬱症である。私は故意に憂鬱症を自分に注入し、吸引してしまったのであろうか。憂鬱症とは考え過ぎのことである、しかし、私は考えるように造られたのではないか。憂鬱症とは勉強のことである。しかし、私の職業は勉強を必要とするものではないか。私は、故意に、意図的に、憂鬱症を招くようなことは何一つ

していない。それなのに、私は憂鬱症にかかり、それによって死ななくてはならないのである。自分で自分の死刑執行人となった人、またそうするために窮余の策を用いた人の例は多くある。ある人達は身辺に毒を常々用意していた。毒を指輪の空洞のなかに隠した者も、愛用のペンの軸の中に隠した者もある。ある者は牢獄の壁に頭をぶつけて死んだ。ある者は暖炉の火を食らって死んだ。また、それよりももっと我々の場合に似ていると思われるのは、両手を縛られていながら、喉を膝の間に挟んで窒息死した人の例である。²⁶⁰しかし、私は自分に対して何もしてはいない。それなのに、私は自分の死刑執行人となってしまった。僅かな原因、些細な事物が死を招いた例を我々は知っている。針や、櫛や、引き抜かれた髪の毛が瘡痕を起こして、人を殺したことがある。しかし、既に私が言ったように、蒸気が原因である場合に、蒸気とは何かと改めて問い直されれば、私には蒸気が何であるか答えることができないほど、蒸気は感覚では補足し難いものである。それほど無に近いものが、我々を無にかえすのである。しかし、この蒸気をさらに拡張して、希薄にすれば、すなわち、我々の持って生まれた肉体という小さな部屋から、国家という政体について考えてみれば、我々の肉体のなかの蒸気にあたるものは、国家における風評である。我々の肉体に害を及ぼし、病気をまねく悪性の蒸気にあたるものは、国家における悪質な風評、すなわち、人を中傷し、侮辱するような罵詈雑言である。国家の心臓は王であり、その頭脳は顧問院であり、国をまとめる行政官はそこから派生する神経である。そして、国家の生命は名誉と、正しい尊敬と、正当な敬意であるから、これらの悪質な風評という蒸気が指導的な地位にある人を襲うときには、国家全体が病気になるのである。指導的な地位にある人達は様々な特権で守られてはいるが、我々と同じ不幸から逃れることはできない。我々にとって最も悪質な蒸気は我々の体内から発生するものであるが、同様に、最も不名誉な風評、最も国家を傷付ける噂は、国内から生まれるものである。私が通りで吸い込むどんなに悪い空気も、どぶ川も、屠殺場も、糞の山も、下水も、私が体内で発生させる蒸気ほどには、私を損なうことはないであろう。どんな外国の脱走兵も、貧

民達も、国内の誹謗者、罵倒者、不敬な嘲笑者ほどには害毒を及ぼさないであろう。毒物や有害な動物について本を書く人は、²⁶⁷蛇だけでなく、蚤についても述べるのが普通である。何故なら、蚤は人を殺さないが、甚大な被害を及ぼすからである。同様に、妄りに人を誹謗しからかう者は、自分達が持っている毒を口から吐いているのである。しかし、場合によっては徳を用いて、いかなる時でも権力を使って、蒸気を抜き取る鳩の働きをさせ、頭に恐ろしい害が及ぶのを防ぐことはできるであろう。

論 議 XII

私の神よ、私の神よ、あなたの僕であるヤコブは、「あなた方の命はどうなるのか」と問い、それに答えて、「わずかの間現れて、やがて消えて行く霧にすぎません」と言っているが、²⁶⁸それは私の答えでもある。彼が私に「お前の死とは何か」と尋ねれば、私は「それも霧にすぎない」と答えることができるであろう。生も死も霧のような蒸気であるならば、私にとって生きることも、死ぬことも、同じことになるはずである。あなたは蒸気を良くもない、悪くもない、中性的なものに造られたので、蒸気はあなたの恵みも、裁きも共に表し、いずれを表す絵文字ともなることができる。あなたは蒸気によって、我々に対するあなたの豊かな恵みを表現されている。その蒸気が、なぜ常に我々にとって良いものであり得ないのであろうか。「蒸気が地下から湧き上がって、土の面をすべて潤した」²⁶⁹と書かれているではないか。また、あなたは蒸気によって我々を是認し、蒸気と共に我々のあなたへの贈物である生贄を受けられたではないか。²⁷⁰生贄は蒸気であったのである。また、「かぐわしい煙があなたに立ち昇って行った」²⁷¹とも書かれている。また、あなたは蒸気の姿をとって、すなわち、「天の露」²⁷²となって我々のところに來られたし、我々があなたのところに行くときも、蒸気となって行くのである。また、世俗的にも、精神的にも、我々の存在と所有の全てがその人のなかに所有され存在している人、すなわち、祝福

されたあなたの御子は、その知恵において、蒸気と呼ばれている。「知恵は（御子は）神の力の息吹、全能者の栄光から発する純粹な輝き」²⁷³であると書かれているのである。ああ、私の神よ、あなたはその息吹のなかに、その多くの許しのなかに、また、その御言葉のうちに、香しい蒸気をもっておられる。それなのに、その蒸気が悪性で有害な意味を与えられることがあり得るのだろうか。いや、それは当然のことである。何故なら、我々は蒸気に過ぎないもの（すなわち、罪、それは蒸気、または煙に過ぎないが、我々の視力を奪い、危険を見えなくするもの）によって、あなたを怒らせてしまったからである。だから、あなたが蒸気によって我々を罰するのは当然のことである。ある賢者が言っているように、あなたは私たちの「悪事の結果に従って報い」²⁷⁴られ、また、彼がそこで言っているように、「火の息を吐く、未知の動物」²⁷⁵によって罰せられるのである。それ故にあなたの予言者の一人を通して、あなたは「天と地にしるしを示す。それは血と火と煙の柱である」²⁷⁶と威嚇されたのである。あなたの御心を最も良く理解し得た使徒も、「立ちこめる煙」²⁷⁷と言っている。また、あなたの予言者の一人は、あなたの恐ろしい姿を、「御怒りに煙は噴き上がる」²⁷⁸と描き、別の予言者はあなたの怒りに「神殿は煙に満たされた」²⁷⁹と言っている。また、此の世の終りまで予言を続ける者は末世の不幸について、「底なしの淵の穴が開くと、大きなかまどから出るような煙が穴から立ち上り、太陽も空も暗くなった。そして、煙の中から、いなごの群れが地上に出てきた。このいなごには、さそりの持っているような力が与えられた」²⁸⁰と言っている。さて、煙は火から生まれるが、火の中に消えるものである。罪の煙、あなたの怒りの煙は、地獄の業火となって果てる。しかし、あなたは私の体内の煙を散らして、蒸気を吸引する手段を与えて下さってはいないのであろうか。天使達が天国から墜ちたとき、あなたは我々を天国に上げ、呼び寄せることによって、天国の回復を計られた。我々が天国を追われて此の世に墜ちたとき、あなたは此の世の回復も計られたが、それは以前とは別な方法、すなわち、あなたの御子に人の性質を与え、此の世に下すことによって行われたのである。我々の最後の行為は、栄光に昇ることである

(天使のところに昇るのである)。しかし、我々の最初の行為は、あなたの御子の道を歩んで下ることであり、鳩となって下ったあなたの祝福された聖霊の道を歩むことである。それ故に、あなたは自然のなかに我々の病気を直す薬を用意されたのである。すなわち、私の下半身に鳩を貼ることによって、体内の蒸気が下降するようにされたのである。そして、それをたとえて、聖霊の訪れによって我々の罪の蒸気も下降し、我々は罪を足下に征服することができると悟るようにされたのである。あなたの御子が洗礼を受けた時には聖霊が下った。²⁸¹⁾あなたの使徒達が満たされ、説教を始めた時にも聖霊が下った。²⁸²⁾さあ、我々も自分の虚勢、機知、欲望、妄想などの蒸気を捨てて、素直な心であなたの儀式を守り、あなたの御言葉に従おうではないか。そうすれば、我々に与えられているこれらの鳩が我々を生かしてくれるであろう。

祈 禱 XII

ああ、永遠の最も恵み深い神よ、あなたは我々が罪を犯して破滅するのを許し、我々には自ら回復する力は与えられませんでした。我々が容易に、また気軽に、入手できる回復の手段を我々に恵まれました。どうか、この平凡なあなたの被造物によって、私の肉体的回復が助けられるように、また、あなたの定められた神聖な儀式を通して、私の精神的な回復が進められるようにして下さい。そして、この鳩という被造物を、あなたのあらゆる方法を通して育み、自然を通して、我々の肉体的健康に医学的に貢献するもとされ、あなたの立法を通して、罪の代償として捧げるべきものと定め、²⁸³⁾あなたの福音書を通して、宿った聖霊とともにあなたの御子の洗礼の証人とされたように、²⁸⁴⁾鳩とその効力を私の魂にまで到達させて、そこに、あなたが鳩に自然を通して与えられた性質、すなわち、素直さ、優しさ、穏やかさを与えて下さい。そうすれば、私はあなたに対する全ての不従順の蒸気を足下に従え、あなたの御子の力と勝利に習い、私の墓を征

服して、その下に潜んで私を貪ろうと待ち構えている獅子と龍を踏みつけることができるでしょう。ああ、主よ、あなたの予言者の一人を通して、あなたは鳩を「谷間の鳩」²⁸⁵⁾と呼ばれたが、谷間の鳩は「山に昇る」と約束されている。あなたは私を病気の谷間に置いて、「人の子よ、これらの骨は生き返ることができるか」²⁸⁶⁾と言われた、あの骨の野におけるあなたの質問に相応しいほど低いところに落とされたが、その時が来れば、どうかこの谷間からも仰ぎ見ることができるあの山の頂きに私を引き上げて下さい。そこはあなたの住まわれるところ、神聖な丘、そこに登れるのは「潔白な手」²⁷⁴⁾を持つ者だけです。しかし、唯一つ強力な清めの力を持つもの、すなわち、あなたの御子であるイエス・キリストの血によらなくては、誰一人そのような手を持つことはできないのです。アーメン。

XIII 多くの斑点でその悪性を顕にした病気は、 郊外である胸部に迫る

発疹により、病気はその伝染性と悪性を顕にする

黙 想 XIII

世界は海と陸からできていると、我々は言う。まるで海と陸が均等に存在するかのようである。しかし、東半球よりも西半球に海が多いことを知っている。天空には星が溢れていると、我々は言う。まるで天空には星が均等に存在するかのようである。しかし、南半球よりも北半球に星が多いことを知っている。人間は不幸と幸福を基本的要素として合わせ持つと、我々は言う。まるで両者が均等に存在するかのようである。また、人生の日々は有為転変に富むと、我々は言う。まるで良い日々と悪い日々が均等に存在し、人は昼と夜の均等な彼岸に常に住み、幸福と不幸を均等に持っている

るかのようである。しかし、事実はそうではない。人は不幸を飲むが、幸福は味わうに過ぎない。人は不幸を日々旅するが、幸福は時たま歩いてみただけである。さらに悪いことに、不幸は決定的、断定的であるが、幸福は不確実で、暫定的である。全ての人不幸を不幸と呼ぶが、幸福は人の好みによって名前が変わる。いま私に予期しない事態が生じ、私の病が発疹によってそれが悪性であり、伝染性のものであることを顕にしたが、その事によって医者がかっとはっきりと何をすべきか知ることができると考えれば、この事態は慰めとなる。しかし、私の病の悪性が強く、医者が何をしても何の役にも立たないと考えれば、この事態は大きな不幸でもある。敵が自立してその目的を追求し、達成できる時に、その姿を現すのであれば、それは慰めとはなるまい。内部的な陰謀が起こった場合には、自白のほうが拷問による告白よりも役に立つ。同様に、伝染性の病気の場合も、自然が自発的に告白をし、外に表れる兆候を自ら発して、大声で叫ぶ時には、慰めを与えられるものである。しかし、強心剤の効力によりそうする場合には、まるで拷問により白状しているようなものである。拷問を加えれば、我々は人の悪意を知ることができるが、拷問を加えた後も、以前と同じように悪意が残っていないか知ることができない。謀反は確かめられても、改悛は確認できないのである。また、本人については確認できても、共犯者については確かめられないのである。最悪の事態だと知ることができても、それには救済手段がないのであれば、殆ど何の慰めにもならない。それよりも更に不安なことは、重病であると知りながら、果たして最悪の事態が来たのかどうか分からない場合である。母親は息子を生めば、それで慰めを与えられる。彼女の身体は軽くなるのである。しかし、もしも彼女が歴史を予言的に読むことができ、その子がどんなに悪い息子、どんなに悪い大人になるか知ったならば、彼女の心は以前よりも大きな重荷を背負うことになる。どんなものを買っても、何かしら隠れた不便が障害となる。どんな幸福でも、そのなかに贗金や悪貨のような性質を持たないものはない。それは混ぜ物をして造った合金のようなものである。これと同じことが（少なくとも、似たようなことが）徳を学ぶにあたっても言える

のではないだろうか。私は貧乏をし、腹を減らさなければ、感謝という徳を会得できない。また、悲惨な目に合い、苦悩を経験しなければ、忍耐という徳を知ることはできない。我々はなんと深く掘らねばならぬことか。それも多くの不純物を含んだ金を得るために。しかも、我々の金を試す試金石は、他と比較する以外にない。他の人達と比較して、或るいは、他の時点の自分と比較して、より幸福であるか否かだけなのである。それなのに、私の発疹は、以前私が確信していたよりも、いま明らかに事態は悪くなっていると告げている。ああ、幸福への第一歩としては、何と惨めな出発であろうか。

論 議 XIII

私の神よ、私の神よ、あなたは私の病床をあなたの祭壇とされたが、私はこの私自身以外にあなたに捧げるべき生贄を持っていない。それなのに、発疹などの「傷のない」²⁸⁸⁾生贄でなくては、あなたは受け取るのを拒まれるのか。あなたの御子が肉体的に私の身体に宿り、その結果、あなたは汚れないものを期待されるようになったのであろうか。丁度あなたの御子がその魂となったが故に、あなたの花嫁が「なにもかも美しく傷はひとつもない」²⁸⁹⁾と言われるものになったように、聖霊がこの私の身体の魂となったのか。我々のあらゆる罪と汚れを担なわれたのに、あなたの御子には何の汚れもないのか。あなたの花嫁、すなわち、あなたの教会にはどんな汚れもないのか。その美しく汚れのない身体の一つ一つの手足、教会の会員一人一人の魂は、罪と汚れに溢れているではないか。あなたは、「肉によって汚れてしまった彼等の下着さえも忌み嫌いなさい」²⁹⁰⁾と命令されている。肉そのものが下着であって、肉は自分で自分を汚す。「雪解け水でからだを洗っても、着ているものさえわたしにはいとわしい」²⁹¹⁾はずなのに、「わが身を憎んだ者は一人もおらず」²⁹²⁾なのである。ああ、主よ、あなたがもしも汚れないものを求められるなら、誰を御覧になればよいのであろうか。あ

あなたの恵みは私の魂の奥まで浸透するが、なお私の汚れを取り除くことはできない。あなたの罰は大いに私を苦しめ、深く私を焼くが、私の汚れを取り去ることはできない。あなたの子供であったイスラエルの民は、「あのとき、主の共同体に災害がくだり、今日に至ってもまだ清められていないではないか」²⁹³とやっているから、この点を良く理解していたはずである。あなたは恵みの雨を我々に注がれる。しかし、我々の頑固さを全て溶かし去られるわけではない。あなたは我々の心を火で焼かれるが、我々の不純物を焼き尽くされるのではない。あなたは我々の傷をいやされるが、傷跡は残る。あなたは我々の血を清められるが、発疹はそのままにされる。しかし、あなたの憎まれる発疹は、我々がひそかに隠す汚点である。「偶像を作る者は、汚れをすべて塗り隠した」²⁹⁴と知恵のある者は言っている。我々が我々の汚点を隠すとき、我々は我々の汚れ、不浄を偶像に仕立て、それを崇拜することになる。しかし、もし私の汚点が表にあらわれれば、その方法を問わず、自然の力によって自発的に告白する場合でも（恵みは改悛した人の本性であり、恵みの力とは本性の力である）、或るいは、強心剤の力を借りる場合でも（あなたの与える罰は強心剤である）、いずれの場合でも、汚点の姿があらわれるときには、あなたはその告白を恵み深い心で受け入れて下さる。あなたの僕であるヤコブが「ぶちやまだらの」²⁹⁵羊を産ませようとした時に、あなたは彼の「若枝」を祝福された。また、あなたの罰が我々の汚点を明らかにし、我々があなたに謙虚な心で自分の罪を打ち明けるときには、あなたは鞭として用いられるあなた自身の「若枝」を祝福される。その時が来るまで、あなたは「医者が必要とするのは、丈夫な人ではない」²⁹⁶と言いつけられるであろうが、それは当然のことである。我々が我々の病をあなたに打ち明けるまで、自分は丈夫であると思っているのであり、我々が我々の汚点をあなたに見せるまで、あなたは薬を与えては下さらないであろう。しかし、いま私はそれを行うのであるから、主よ、私は「晴れ晴れと顔を上げ、動ずることなく、恐怖を抱くこともない」²⁹⁷状態ではないのか。私の汚点はあなたの御子の身体に属するものであり、御子が此の世に下り、自ら探し求め、挑戦し、獲得されようとしたものの

一部である。私が私の汚点をひらいて見せるとき、私は当然御子に属すべきものを彼に捧げているに過ぎない。そうするまでは私は彼の権利を奪い、横取りしているのである。そうであるならば、私の告白により、あなたの御子のものとして、あなたが私の身体の上に発疹を認められるとき、私はそれが私の恐怖を地獄に向ける死の爪跡であるとは考えないのである（何故なら、あなたの御子について、「彼は陰府に捨てておかれず」²⁹⁸）と書かれているからである）。私の胸と魂に現れた発疹は、大空に輝く星座のように、あなたの御子があなたの右に座っている天国へ、私の心を向けるものであると、私には思えるのである。

祈 禱 XIII

ああ、永遠の最も恵み深い神よ、我々が自分自身の価値について考えるとき、あなたは全てのものを全くだで我々に与えて下さると言うべきであるが、後になってあなたが求められる感謝・返礼のことを考えると、何物もただでは下さらないと言うべきである。どうか、あなたの恵みに対して、とりわけ、あなたの裁きのなかにあなたの許しを、あなたの罰のなかにあなたの慰めを、私が感じるができるという恵みに対して、私の心からの感謝を受けて下さい。ああ、主よ、「あの家はあなたの訪問を受けた」とか、「あの患者にはあなたの目印・烙印が押してある」とかいった言葉の普通の意味の恐ろしさは私も知っている。しかし、あなたの訪問を受けない家があれば、それはなんと悲しい、哀れな家であろうか。また、あなたの目印を持たない人がいるとすれば、それはなんと愚かな、迷える人であろうか。ああ、主よ、あなたが私の身体にもたらされたこの熱は、あなたが私を永遠にあなたのものとして、封印するために蠟を溶かしておられるのである。また、私の発疹は、あなたがあなたの名前を刻み、私をあなたのものとされる印である。今あなたが私を捕らえて直ちに私を所有されようとしているのか、それとも、今暫く私を此の世に留めて、いずれ将来私

を占有されようとしているのか、それについて私は何の限定も、条件も、
選択も、希望も述べる積もりはない。それは家屋や土地を法律に基づいて
譲る場合と同様である。ああ、私の神よ、私があなたに祈るのは、あなた
が常に私と共にあり、この寝室とあなたの寝室が同じ部屋であり、この部
屋で私が肉体の目を閉じることと、あの世で私が魂の目を開くことが同じ
行為であること、ただそれだけである。

XIV これは危機的な日々が起こったと、医者たちは言う

これらの症状は危機的な日々
起こったと、医者たちは認める

黙 想 XIV

私は人間を実際より悪いものに仕立てたり、彼の状況を実際よりも悲惨
なものにする気はない。たとえそうしたくても、できないであろう。人間
は神をどんなに誉めても、おもねることも、讚美し過ぎることもできない
が、同様に、人間は自分をひどく罵っても、それで自分を傷つけることは
できないし、また、どんなに自分を過小評価しても、し過ぎることはない。
人間は少なくともこれだけは忘れてはならない。すなわち、此の世に於て
彼が持っている偽の幸福は、全てその時間と、季節と、危機的な日々を持
ち、それが発生する時に従って判断され、命名されるのである。時間は何
物よりもはかないものであるが、その時間が我々の幸福の不可欠な要素で
あるならば、我々の幸福はなんと哀れな要素からできているのであろうか。²⁹⁹⁾全ての物事は宇宙の空間のどこかにおいて行われる。しかし、空間は
最も身近にある空気の虚な外皮であると考えれば、空気はなんと薄く、希
薄なものであろうか。また、外皮、空気の外皮もなんと薄い膜であらうか。

全ての物事は時間の中に於て行われるものでもある。しかし、その時間とは単に「運動の尺度」に過ぎないのであり、³⁰⁰時間には過去、現在、未来の三段階があるように見えるけれども、そのうちの最初のものであり、最後のものは存在しない（過去は既に去ったものであり、未来はまだ来ていない）のであるから、³⁰¹また、我々が現在と呼ぶものも、この文のなかでそれを現在と呼び始めたときの現在と、今の現在とは同じではない（現在という言葉、いや、今という単音節の言葉を見いだす前に、現在も、今も、過ぎ去ってしまう）から、もしも、この空想の産物に過ぎない、半ば無に等しい、時間が我々の幸福の本質の一部であるならば、我々の幸福はどうして永続的なものであり得ようか。時間は幸福の一部ではない。どうしてそう考えることができようか。時間はそのどの部分を取ってみても、幸福の一部ではないのである。もしも我々が永遠を考えるならば、その中に時間は入ることはできない。永遠は単に時間の果てしない流れではないのである。時間は言わば長い完結した文章の短い挿入句のようなものである。たとえ時間がなくても、永遠は少しも変わらずに存在し続けたことであろう。もしも我々が永遠ではなく、無窮を考えるならば、即ち、時間無しに始まったものではなく、時間が減じた後に生き残るものを考えるならば、最も長生きをする被造物の寿命だって、それに比べれば、ほんの一分に過ぎない。ましてや、人間の寿命は太陽や樹木の寿命に比較しても、ほんの一分に過ぎない。しかも、その短い一生の中に、我々が良いものを受ける幸運、好機は誠に少なく、その上、折角与えられた幸運にも気付かずに、取り逃がすことが多い。この地上における人間の幸福とは、なんと目まぐるしく変わる、得体の知れない蜘蛛の巣であろうか。幸福になろうとすれば、我々は絶えず見張って蜘蛛の巣を補修し、無に等しい時間の小さな断片である幸運を捕捉しなくてはならない。しかし、時間なしには最も良いものも我々にとって無意味である。名誉も、快樂も、財産も、時ならぬ時に、すなわち、我々が年老いて感覚を失い、毫碌した後に与えられたのでは、その効力も、名目も失ってしまう。我々が人前に出て名誉を受けることができなければ、名誉は名誉とは言えない。快樂もそれを味わう感覚を我々が失っては無益

である。財産もそれを捨てなくてはならぬ者には無用である。名誉にとっても、快樂にとっても、財産にとっても、我々の青春がその危機的な日であり、それらは青春によって判断され、命名され、生命を与えられ、形相を獲得する。それらは、我々が毫碌した後に与えられても、吊いの鐘が鳴る頃に与えられる強心剤、または、処刑の後に与えられる赦免状のようなものである。我々は火の温もりを愛するが、真夏に火にしがみつく者はいない。我々は地下室の気持ちの良い涼しさを喜ぶが、そこでクリスマスを楽しむ者はいない。春の楽しみも秋にはそぐわないであろう。もしも幸福がこの様に季節や風土に依存するものであれば、風土を変え、季節とともに移動し、常に同じ季節を楽しむ小鳥のほうが、我々人間よりもずっと幸福であると言わねばなるまい。

論 議 XIV

私の神よ、私の神よ、我々が我々の日々の計算をする必要がないのであれば、あなたはあなた自身を「日の老いたる者」³⁰²⁾と呼ばれることはなかったであろう。また、我々に我々の収穫を補うために、多くの日々が与えられているのであれば、あなたは「なぜ、何もしないで一日中ここに立っているのか」³⁰³⁾と叱られなかったであろう。あなたが「明日のことは思い悩むな、その日の(毎日の)苦勞は、その日だけで十分である」³⁰⁴⁾と言われたときに、あなたは我々が此の世に関する全てのことを、本当に、完全に、忘れ去るように命令されたのであろうか。あなたが書簡を通じて「あなたがたは、いろいろな日、月、時節、年などを守っている」³⁰⁵⁾とガラテヤの信徒を叱り、また、同じ使徒を通じてコロサイの信徒に「あなたがたは、祭りや新月や安息日のことでだれにも批評されてはならない」³⁰⁶⁾と言って、全ての厄日、記念日などを禁止されたときに、果たしてあなたは日々の考慮や区別は全て取り去られたのであろうか。確かに、あなたは我々の救済に不可欠なものとしては、それらを取り去られたが、我々の信仰を助け、高

揚するものとしてそれらを残し、星が軌道で時々止まるように、我々が定期的に立ち止まって、あなたが我々の為に行われたことを考え、それらのことが我々にどの様な影響を与え、我々を精神的な回復と、治癒に導いたかを、評議、判断、結審するようにされたのである。何故なら、全ての人には救いの日が用意されているからである。あなたは「今や、恵みの日、今こそ、救いの日」³⁰⁷⁾と言っておられる。また、誰も耐えることのできない「怒りの大いなる日」³⁰⁸⁾があると云われ、その前には邪悪な日々があるから、「邪悪な日によく抵抗し、しっかりと立つことができるように、神の武器を身に着けなさい」³⁰⁹⁾と我々に警告と鎧を与えられた。我々の日々は、我々がそれらについて良く考えることを通して、我々の精神的健康について、自ら判断を下さなくてはならないという意味で、危機的なのである。何故なら、我々の精神的健康は肉体的健康の要である。あなたに愛された僕である聖ヨハネは「あなたの魂が恵まれているように、あなたがすべての面で恵まれ、健康であるように」³¹⁰⁾とガイオに書き送っている。もし我々の魂が痩せ衰えれば、我々の肉体の骨髄は水となる。もし我々の魂が枯れ果てれば、我々の肉体の緑も、美しい荘園も幻想となり、見映えのある人もおぞましい亡霊となる。ああ、私の神よ、我々是我々の思想を規定する努力を惜しまないのに、我々一人一人の厄年に関する議論には何の規定も与えずに放置してよいのであろうか。国家や王国の歴史に於ては周期的に巡って来る特別な年を定めながら、個人の長い一生に於てはそのような年を無視して、天国のことは忘れ去ってよいのであろうか。我々は好奇心を働かして、太古の太祖であるアダムも、次の世の長子であるセムも、信仰の厚い者の父であるアブラハムも、信仰の根を育んだ園である祝福された乙女マリヤも、それぞれの厄年に此の世を去ったことを調べた。しかし、厄年に死んだことを我々が調べたこれらの人たちは、自分の一生の危機的日々を良く調べて、そのなかに救い主に関するあなたの約束を察知したのである。それなのに、もっと多くの危機的日々を持っている我々が、それを見過ごして良いのであろうか。我々は初めの日々である予言者の時代だけでなく、御子を通してあなたが我々に語り掛けられた終わりの日々をも

与えられている。³¹¹⁾我々は「昼の子」である。³¹²⁾何故なら、あなたはテサロニケの信徒に輝いたと同じように、正午の太陽のように赤々と我々を照らしたのである。暗闇に属する者達は（彼等は自ら暗闇を招いた）、すなわち、パリサイ人たちは「もし先祖の時代に生きていても（それは厄日、裁きの日、危険な日である）、予言者の血を流す者の側につかなかつたであろう」³¹³⁾と主張している。それなのに、昼に住む、すなわち、予言者の日々ではなく、御子の日々に住む我々は、我々に与えられた明白な兆候、危険な信号を無視して、予言者を再び石打ち、あなたの御子を再び磔刑にしようとするのであろうか。あなたの御子に逆らう者たち、すなわち、パリサイ人やヘロデ派の者は、危険な日が来るのを待っていた。そうして、その日が来てサタンが御子に対して激昂すると、彼等は御子のところにやって来て、税金について危険な質問をしたのである。³¹⁴⁾彼等は立ち去ったが、その日はサドカイ人にとっても危険な日であった。あなたの霊は、その日にサドカイ人が復活について質問するためにあなたの御子のところにやって来たと、御言葉のなかで語っている。³¹⁵⁾あなたの御子は彼等を黙らせ、彼等はすごすごと帰って行った。しかし、この同じ日は、一人の律法学者にとっても危険な日であった。³¹⁶⁾彼はヘロデ派の人達よりも、パリサイ人よりも、自分の方が学問があると思っていた。彼は最も重要な掟についてあなたの御子を誘惑したが、あなたの御子は彼から言い返す力を奪った。一通り終わって、彼等が再びあなたの御子を悩まし、誘惑しようとしたとき、キリストは彼等すべてを沈黙させて、彼等に危険な日が来たと悟らせたのである。すなわち、キリストが彼等に危険な日々を招いたのである。あなたの霊は、「もはやあえて質問する者はなかった」と言っている。³¹⁷⁾ああ、私の神よ、私の最も祝福に溢れる神よ、もしも、我々があなたを捨てるに相応しい日は何時であろうかと調べ、探し、見付けようとするようなことがあれば、また、今や此の世で宗教は無力となってしてしまったから、今こそ我々は自由になれると言ったり、更に、私の古い宗教を捨てて新しい友達をつくろう、今こそ出世をすべき時だと考えたりするようであれば、その日は何と恐ろしい危険な日であろうか。しかし、ああ、私の神よ、あなた

が腿の関節をはずされたのに、「祝福して下さるまでは離しません」³¹⁸⁾と言ったヤコブの大胆さを真似て、私はあなたにお願いしたい。あなたは私を柩の上に置かれたけれども、あなたが私から、私の寝床から立ち去る前に、私に危機を認識させて、自分で自分を裁く力を今日与えて下さい。あなたにとっては、「一日は千日のようで」³¹⁹⁾あるから、ああ、主よ、どうか私のために今日の一日を一週間にして、今日の一日を七日、危機的な七日であると思わせ、私はあなたによって裁かれないために、自分で自分を裁かねばならないと悟らせて下さい。³²⁰⁾まず最初の日として、今日はあなたが視察のために私のところに来られる日である。それなのに、私にはあなたに良く見られたいと願うだけで、わざわざ来られるあなたをもてなすことができないのか。我々は身分の高い方々の訪問を受けるとき、その服装や、馬車の装備や、来訪時の威厳などで、その人の価値を判断するのではなく、ただ訪問を受けたことを喜ぶのである。従って、あなたがどのような姿で来られようとも、それは私にとって一つの危機である。何故なら、あなたは如何なる手段に訴えても私を探し出し、見失いたくないと思っておられるからである。このように、第一日はあなたが病の姿で私を訪ねられる日であるが、第二日は私の良心の光りと証しの日である。この日には夕べもあれば朝もある。すなわち、私の魂に潜む罪の意識もあるが、あなたの御子の輝かしい日の出もある。あなたが天地を創造された時にも、「夕べがあり、朝があった」³²¹⁾と書かれている。しかし、夜のことは書いてない。罪に対する私の悲しみは夕べである。しかし、それは夜で終わるのではない。夜は明けて、次の日を迎える。しかし、それはあなたによって、いや、あなたの言葉を語る人でもあり、あなたの言葉でもある御子によって、私の良心が苦しめられ、矯正され、告発されて、許される日でもある。この危険な日、私の良心の審問の日の次には、第三日が来る。それは私が聖体の形において御子を受け入れる準備をし、それに相応しいような自分になる日である。不必要な論議に係わり、敢えて危険を冒そうとする者にとっては、この日は多くの迷い道や、滑り易い階段をもってはいるが、如何なる人もあなたの意図された旅を終え、目的地に到達することが出来る

だけの明るい時間も持っている日である。すなわち、パンと葡萄酒が私の身体に吸収されるのと全く同じように、あなたの御子の身体と血が、パンと葡萄酒を受ける行為を通じて、私に与えられることを知ることが出来るのである。そうして、ああ、私の神よ、この様にあなたと共に三日を過ごせば、すなわち、あなたの訪問の日、私の良心の日、和解の印を受ける準備をする日を送れば、私は第四日の黒雲と嵐を恐れることがそれだけ少なくなるはずである。第四日は私が溶解して、此の世から連れ去られる日である。死を思うことが苦痛であるような状態は、幸福の名には値しない。「死よ、お前のことを思うのは、何と苦痛に満ちたことか、裕福で平穩無事に暮らしている者にとって、また、心を悩まさず、すべてがうまくいき、まだ楽しみを味わえる力を持つ者にとっては」³²²と記されている。ああ、私の神よ、あなたは私に病を送り、楽しみを味わえないようにして、私に断食をさせ、私の溶解という大きな祭日の前夜とされた。そうして、この死の日が、私を第五日、すなわち、復活の日に導くのである。なぜなら、墓の中で我々が過ごす日がどんなに長い日であっても、その日と復活の間には他の日はないからである。復活の日に、我々は衣服を与えられ、再び肉体の衣を纏うのである。しかし、その時、生前の日々を正しく用いた者は、栄光という新しい衣を与えられるが、そうでない者は古い衣である罪深い肉体だけを与えられ、苦しみに永遠性を加える他には、何も新しいものは得ることがないのである。さて、この私の目覚めの日、私の魂に肉の衣を着せ、私の身体にキリストの身体を着せる日は、私の魂と肉体を共に第六日に導く。それは裁きの日であり、誠に、しかも、最も字義通りに、危機的、決定的な日である。何故なら、この日に全ての判断が私に示され、私も此の世の裁きに加わるからであり、また、この日の裁きは私が第七日に相応しいことを宣言し、あなたの安らぎと、あなたの栄光と、あなたの喜びと、あなたの姿と、あなた自身の中に見出される永遠の休日を、私に与えてくれるからである。私はその休日の中にいつまでも住むことであろう。最早、日を数える必要もなく、御子と、聖霊が、あなたと天地を創造して日々をつくる前に、三人揃って住んでおられた時のように、いつまでも住

むのである。

祈 禱 XIV

ああ、永遠の最も恵み深い神よ、あなたは天地創造において光を造る前には、闇が存在することを許されたが、光を造られた時には、昼だけでなく夜も照らすように、光を倍加された。あなたは私の心に、ある程度の暗闇、すなわち、悲しみと憂鬱の黒雲がその影を落とすことを許されたが、私にあなたの霊の光を与えて、暗闇の王である悪魔がそれに逆らうことが出来ないように、また我々の心の最も暗い夜、すなわち、我々の最も悲しい思いも、霊の光で明るく照されるようにして下さった。それ故に、私は謙遜な心であなたの御名をたたえ、感謝してあなたの御名を讃美する。祝福された乙女マリヤに、最も祝福に溢れるあなたの霊が訪れた時でさえも、それは「影が包む」³²³⁾という言葉で表現されている。その時には、すべての光の泉である聖霊が臨んだのであるが、それでも「影が包む」と言われたのである。いや、光がなければ、影もないのである。どうかこの病の中にあっても、私があるあなたを忘れ、我を忘れて、無知の暗黒に沈むことがないように、あなたの恵み深い摂理を働かせて下さい。また、霊の力が弱って、自分を呪うとき、私の上に落ちる暗い影を、「慰の源である神」³²⁴⁾よ、あなたの逆らうことの出来ない光でもって追い払って下さい。これらの影が私に対してその役割を果たすとき、私は取り返しのつかない暗闇に落ちるのではあるが、あなたの霊がその暗闇に対してその役割を果たし、暗闇を追い払い、私を明るい一日のなかに据えて、この一日が、私にとって、危険な日、すなわち、私があるあなたの裁きを私に対して自ら下さねばならない日であると悟らせて下さい。また、あなたの使徒にあなたの御子が語られた「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」³²⁵⁾という言葉は、私にも及ぶものであると確信させて下さい。

XV 昼夜を問わず眠れない時を過ごす

私は昼も夜も眠れない

黙 想 XV

自然を学んだ人達は、眠りには二つの働きがあると考えている。眠りは此の世において肉体の生気を回復させるものであるが、同時に、あの世に対する用意を魂に与えるものでもある。眠りは御馳走であるが、御馳走を食べる前の祈りでもある。眠りは保養であり、我々を陽気にするものであるが、同時に、それは教義問答であり、我々を教育するものである。我々は強くなって目を覚ますことを希望して寝るのであるが、もう二度と起き上がれないかも知れないと考えて寝るのである。眠りは麻酔薬であるが、その影響下ではもう二度と意識を回復しえないような麻酔薬であるかも知れないのである。このように、自然を学んだ人達は、二次的、比喩的思考によって、二次的、象徴的意味を見出し、眠りは死の表象であると考えたが、自然が始まる前にその仕事を終え完成された神は、(自然は神の徒弟であり、最初の七日で修業を終え、その後は神の組頭として、神の下で働いている)、そのような神は、もともと眠りを死の象徴として造られたのではなく、ただ肉体的な安らぎによって人を元気づけるために造られたのである。そのとき死は神の意図のなかにはなかった。しかるに、人が自ら自分に死を招いてしまったのである。そこで、神は人が造った死を手にとって、造りかえられた。死は恐ろしい姿と顔をしていて、それを造った人を震え上がらせるが、神はそれを眠りに変えて、親しみ易い、厚意的な、好感の持てる、受け入れ易い形にして与えたのである。その結果、人は眠りから目を覚まして、私が死ぬ時も先刻寝ていた時と少しも変わらないのか、私が見ていたあの恐ろしい白昼夢、すなわち、私の憂鬱な心が描き出した眠

りに似た死のあのぞましい、身の毛もよだつような姿は、恥ずべきものであったと呟くようになったのである。七十年の人生を全うするために、眠りが必要であるように、永遠に続く生を受けるためには、死が必要なのである。しかし、死は我々の敵であるから、我々が死から身を護ることを神は許されている（すなわち、日に二度食事をするが、その度に、我々は死から我々を護るために食物を頂くのである）。同時に、神は死を甘い眠りに変えて、日に一度、我々を我々の敵に渡される。眠りは死である。丁度食物が我々の命であるように、眠りは我々の死である。ところが、私の病の不幸は、私から生まれ、私が造り出した死は私の目の前にありながら、神が和らげて、受け入れ易くして下さったような死は、何処にも見えないことである。此の世には、自ら墓穴を掘り、重石を載せられて、牢に繋がれている囚人がなんと多くいることであろうか。彼等はこの瞬間にも自らの重みで墓穴を掘り続けているのではあるが、それでもこの時間に彼等は寝ているではないか。また、今日友達が死に、あるいは、明日友人の死を見なくてはならない人がいるが、彼もまたそれまではぐっすり眠っている。私にはそれが出来ない。もし、時の区別のない永遠の世界に入れるのであれば、何故、いま此の世に於て私はひたすら時を数えることだけを私の仕事としなければならないのか。何故、私の心の気怠さが私の臉に及び、私の心と同じように、臉も眠ってしまわないのか。私は最早ものを見る喜びを失っているのであるから、何故、目を閉じて眠り、視力を失ってしまわないのか。また、もし、一度目を覚ましたら決して再び眠ることのない神の国に行こうとしているのなら、何故、私はこの不眠を、あの世での永遠の目覚めの前日、また、その準備と考えることが出来ないのか。

論 議 XV

私の神よ、私の神よ、(あなたがそう言われたので)、「イスラエルを見守る方は、まどろむことなく、眠ることもない」³²⁶⁾と私は知っている。しか

し、あなたが見守っているイスラエルの民は眠らないことはあるまい。また、(あなたがそう言われたので)、「彼等の滅びが眠ることのない」³²⁷⁾人達がいることを私は知っている。しかし、あなたが彼等の救いとなられた人々が眠らないはずはあるまい。それとも、彼等があなたのイスラエルであり、あなたが彼等の救い主であるという証拠・保証を、あなたは彼等から取り去られようとしておられるのだろうか。あなたは「愛する者に眠りを与えられる」³²⁸⁾と書かれているが、私にはあなたの愛の印が与えられないのか。「あなたたちは脅かされることなく安眠することができる」³²⁹⁾と書かれているが、私はそのような保護を受けられない罪人なのであろうか。ヨナは危険な嵐の中でぐっすりと寝込んでいた。³³⁰⁾あなたの祝福された御子は、別の嵐の中で眠っておられた。³³¹⁾それなのに、私にはこのような前例は何の役にも立たず、何の利益にもならず、全く適用されないのであろうか。あなたの御子に仕えた使徒の一人は、ラザロについて「眠っているのであれば、助かるでしょう」³³²⁾と御子に言ったが、私についてはそのようなことが言われる余地はなく、その逆なのであろうか。もし眠れなければ、かれらの言う意味で、私は助からないのであろうか。ああ、私の神よ、このことを、あまり厳格に、あまり字義通りに、私が受け取らないように私を導いて下さい。あなたの賢い僕であるソロモンは「昼も夜も眠らずに努める」³³³⁾人がいると言っている。それが此の世を愛する人のことか、それとも、知恵を愛する人のことか、また、ソロモンは不眠を正しいと考えているのか、それとも、非難すべきことだと考えているのか、我々には分からない。我々に分かることは、「悪事をはたらかずには床に就かない」³³⁴⁾人がいることである。悪事の後では、彼等は眠るのである。また、「金持ちは食べ飽きていてねむれない」³³⁵⁾ことも我々には分かっている。「人々が眠っている間に、敵が来て、麦の中に毒麦を蒔いて行った」³³⁶⁾こともある。また、長老たちが、御子の墓を守っていた番人に「弟子たちが夜中にやって来て、我々の寝ている間に死体を盗んで行った」³³⁷⁾と言わせれば、もっともらしい言い訳、真しやかな嘘になると考えたこともある。あなたの祝福された御子は、「眠っていたので」³³⁸⁾使徒たちを叱られたのであるから、私は眠れ

なくても不平は言うべきではあるまい。もしも、ガザでサムソンが夜中に起きずにいたら、彼は捕えられていたであろう。また、デリラと寝込んだとき、彼は捕えられたのである。³³⁹⁾あなたの聖書では、眠りは肉体的な休息を意味する場合が多いが、それにおとらず、肉体的な死を意味する場合も多い。時にはもっと恐ろしい意味で用いられている。すなわち、罪そのものを意味したり、³⁴⁰⁾あるいは、罪の罰としての死を意味することもある。³⁴¹⁾多く寝ることは、多くの慰めとはならない。何故なら、あなたは最も恐ろしい、最も決定的な呪いとして、「いつまでも眠る」という言葉を用いておられるからである。すなわち、「わたしは、たけりたつ彼らに、宴を設けて酔わせる。彼らは泥酔して、よろめき、いつまでも眠り続ける」³⁴²⁾と言われたのである。従って、ああ、私の神よ、私の不眠を正しく解釈するためには、私は眠りという行為だけでなく、その先を考えねばならない。あなたの御手は私には軽いと感じられるのであるから、その指が重たいはずはない。この病全体があなたの癒しであるから、その一つの症状が私の不満によって毒になることがあってよからうか。私のような仕事に就いている者には、不眠は当り前のことである。あなたの予言者たちは、見る力を与えられた千里眼であるばかりでなく、休むことなく見張る不眠の者でもある。従って、ああ、私の神よ、あなたの御子の花嫁の言葉を逆転することを許して頂きたい。「眠っていても、わたしの心は目覚めていました」³⁴³⁾と彼女は言っているが、私は「目覚めていますが、私の心は眠っています」と言いたい。私の身体は病み、疲れているが、私の魂はあなたと共に安らかに寝ているのである。健康なとき、我々の目は、一番近くの空気も、火も、天球層も見ず、何物にも遮られることなく、星に達するように、いま開かれている私の目は、此の世のものは何も見ずに、それを通り越して、天上のあなたの平和と、喜びと、栄光を凝視しているのである。あなたの使徒は、眠るとまるで不快にでもなるかのよう、「眠っていないで、目を覚ましていよう」と言っているが、そのすぐ後では、「目覚めていても眠っていても、主と共に生きるようにしよう」と言っているのである。³⁴⁴⁾このように眠れないことは、死に近いことを意味している（何故なら、いずれ本物は

写しに、本人は肖像画になるべきものであるから)。しかし、この私の魂の静かな眠りと、安らぎは、私をあなたに婚約させ、いずれは、死の溶解を通してではあるが、溶解することのない絆で、私をあなたに結婚させてくれるはずである。

祈 禱 XV

ああ、永遠の最も恵み深い神よ、あなたは、あなたの僕たちの病床を、彼等にとっての安らぎの礼拝堂とし、あなたの僕たちの見る夢を、あなたへの祈りや黙想に変える力をもち、また、事実そうなるのであるから、この私の長く続く不眠を、私に与えられたこの眠れない状態を、私の不安や不快とすることなく、むしろ、あなたの前で私が眠らないようにあなたが望んでおられることを明らかにする証拠として下さい。私の不眠が、私の身体にとって、何を示し、何を意味するかは、それを考えるべき立場の者に任せ、私の魂の医者であるあなたは、私の魂があなたの前では常に目覚めているが、あなたの懐の中ではいつでも眠れるように、保護薬を用意し、この病の続く限り私の不眠がもたらす衰弱と狂気から私の悟性を守り、そのような激しい病状が現れる前から、私を忘れずに覚えて、私の病の一部でも罪とは呼ばない保証を私の魂に与えて下さい。私は重たく消すことのできない罪を負って此の世に生まれ、その後も、重たい罪を数え切れなほほど犯した。私はあなたの背後で(そんなことができるかは知らないが)罪を犯し、意図的にあなたの集まりを避け、あなたへの礼拝を怠った。また、私はあなたの面前で罪を犯し、偽善的な祈りをあなたに捧げ、あなたの御言葉を説く時にも、わざとらしい見せびらかしをしたり、自分への配慮を交えたりした。私の貧乏が私を苦しめた時には、断食をしながら不平を言う罪を犯し、あなたの食卓で十分に養われたときは、あなたの神聖な食物と薬を受けながら、それを十分に吟味しなかったり、故意に歪曲したりする罪を犯した。ああ、私の恵み深い神よ、私が多くの罪を犯したにも

かわらず、あなたが私を覚えておられることを私は知っている。何故なら、私があなたに選ばれて、私の名前があなたの「生命の本」に書き込まれたとき、私はあなたの目的のなかに入っていたからである。その時と同じように、この病が原因で私がどんなに道を踏みはずし、逸脱しようとも、ああ、神よ、どうか、あなたが私に喜びを見出された、あの瞬間に立ち帰って、その時の状態に私がいるものと考えて下さい。

[注]

主に原書の側注をもとに、聖書の出典を示す。側注でないものには(*)印を付す。聖書は「新共同訳」を用い、詩編については側注と番号が異なる場合は括弧で示す。

- | | |
|------------------------|--------------------------------------|
| 224. 黙 2:23, 22:12 (*) | 244. 箴 28:25 (*) 共同訳は「主に依り頼む人」である。 |
| 225. サム下 14:25~26 (*) | 245. 箴 28:26 |
| 226. 箴 23:26 | 246. ヨハ 13:2 |
| 227. ヨブ 1:8 | 247. シラ 50:23 |
| 228. エレ 17:9 (9~10) | 248. レビ 26:36 |
| 229. 創 6:5 | 249. ヨシュ 2:11 共同訳は「心は挫け」である。 |
| 230. アモ 4:13 | 250. 王下 6:11 (*) 共同訳は「王の心は荒れ狂い」である。 |
| 231. サム上 13:14 | 251. 詩 109:22 (*) 共同訳は「心は貫かれ」である。 |
| 232. エレ 3:15: | 252. エレ 23:9 (*) |
| 233. 代上 12:33 (*) | 253. 詩 51:17 (19) (*) 共同訳は「悔いる心」である。 |
| 234. 王上 3:9 (*) | 254. サム上 7:3 |
| 235. 申 28:65 (*) | 255. 2コリ 1:22 |
| 236. 箴 15:14 (*) | 256. サム上 25:37 |
| 237. 王上 3:12 (*) | 257. サム上 24:5 |
| 238. 王上 15:14 (*) | 258. サム下 24:10 |
| 239. 王上 3:6 (*) | |
| 240. 詩 24:4 (*) | |
| 241. エゼ 11:19 | |
| 242. コヘ 7:26 | |
| 243. ホセ 7:6 (*) | |

259. 王上 8:38
 260. フィリ 4:7
 261. ヨブ 31:1 (*)
 262. マタ 26:38, マコ 14:34 (*)
 263. マタ 26:39, マコ 14:36, ルカ 22:42 (*)
 264. マコ 15:34 (*)
 265. ローマの博物学者である大プリニウス (BC23~79) は「自然史」を著したが、ヴェスヴィウス火山の噴火を視察し、有毒ガスで死んだ。エトナ山はダンの誤りか。
 266. ローマの歴史家ヴァレリウス・マクシムスは「著名言行録」のなかで、アテネの指導者クレオンの弟であるコーマがこの方法で自害したと言っている。
 267. イタリアの医師であるアルドイヌスの「薬効について」への言及
 268. ヤコ 4:14
 269. 創 2:6
 270. レビ 16:13
 271. エゼ 8:11
 272. 創 27:28 (*)
 273. 知 7:25
 274. エレ 21:14 (*)
 275. 知 11:18
 276. ヨエ 2:30 (3:3)
 277. 使 2:19
 278. 詩 18:8 (9)
 279. イザ 6:4
 280. 黙 9:2~3
 281. マタ 3:16 (*)
 282. 使 2:4 (*)
 283. レビ 5:7 (*)
 284. マタ 3:16 (*)
 285. エゼ 7:16
 286. エゼ 37:3
 287. 詩 24:4 (*)
 288. レビ 22:20 (*)
 289. 雅 4:7
 290. ユダ 23
 291. ヨブ 9:30~31
 292. エフェ 5:29
 293. ヨシュ 22:17
 294. 知 13:14
 295. 創 30:37 (37~39)
 296. マタ 9:12
 297. ヨブ 11:15
 298. 使 2:27, 31, 詩 16:10 (*)
 299. アウグスティヌス:「告白」X, xx, xxi (*)
 300. アリストテレス:「自然学」IV, 11, 219b (*)
 301. アウグスティヌス:「告白」XI, xviii (*)
 302. グニ 7:9
 303. マタ 20:6
 304. マタ 6:34
 305. ガラ 4:10
 306. コロ 2:16
 307. 2コリ 6:2
 308. 黙 6:17
 309. エフェ 6:13
 310. 3ヨハ 2
 311. ヘブ 1:2
 312. 1テサ 5:8
 313. マタ 23:30
 314. マタ 22:15, 17
 315. マタ 22:23
 316. マタ 22:35
 317. マタ 22:46

- | | |
|--|-------------------|
| 318. 創 32:26 | 330. ヨナ 1:5 |
| 319. 2ペト 3:8 | 331. マタ 8:24 |
| 320. 1コリ 11:31 (*) | 332. ヨハ 11:12 |
| 321. 創 1:5 (*) | 333. コヘ 8:16 |
| 322. シラ 41:1 | 334. 箴 4:16 |
| 323. ルカ 1:35 共同訳は「いと高き方の力があなたを包む」である。(*) | 335. コヘ 5:12 (11) |
| 324. ロマ 15:5 (*) | 336. マタ 13:25 |
| 325. マタ 28:20 | 337. マタ 28:13 |
| 326. 詩 121:4 | 338. マタ 26:40 |
| 327. 2ペト 2:3 共同訳は「彼らの滅びも滞ることはありません」である。 | 339. 士 16:3, 19 |
| 328. 詩 127:2 | 340. エフェ 5:14 |
| 329. レビ 26:6 | 341. 1テサ 5:6 |
| | 342. エレ 51:39 |
| | 343. 雅 5:2 |
| | 344. 1テサ 5:6, 10 |